

第 4 章

高等部の研究

高等部

I 研究概要

1 高等部の現状と課題

1-1 「各教科等を合わせた指導」の授業づくり

1-2 学習評価の課題

2 今年度の取組

2-1 「単元を通して目指す姿」と『確かな学び』を育むための授業づくりの要点の設定

2-2 「単元評価計画シート」の活用

II 実践報告

実践報告 7 Aグループ「おうち時間を充実させよう」

実践報告 8 Bグループ「考え、伝え合おう」

実践報告 9 Cグループ「自分の役割を果たそう」

実践報告 10 Dグループ「余暇活動を楽しもう～足湯～」

III 研究のまとめ

1 『確かな学び』を育むための授業づくり」の成果

2 「単元計画評価シート」活用の成果

2-1 計画・評価の明確化

2-2 「確かな学び」の実現に向けた取組

3 今後の実践に向けての課題

3-1 UDLの視点から考える6つの要点とその課題

3-2 「単元を通して目指す姿」における将来像と各教科の関係の整理

※実践報告ページのQRコードから「単元計画評価シート」をご覧ください。

I 実践報告	
実践報告〇	〇学部
生活単元学習「〇〇〇〇〇〇〇〇」	
〇〇〇〇・〇〇〇〇・〇〇〇〇	
■〇学部 第〇学年)	
1 単元について	
(1)単元観	

※公開する「単元計画評価シート」は、個人情報への配慮から、「単元計画シート」、「単元評価シート」、「授業計画評価シート」、「『確かな学び』見取りシート」の一部となります。また、公開終了は、令和7年度8月頃を予定しています。

I 研究概要

1 高等部の現状と課題

1-1 「各教科等を合わせた指導」の授業づくり

高等部では、「各教科等を合わせた指導」（以下、「合わせた指導」）として、生活単元学習と作業学習、日常生活の指導を設定している。生活単元学習は、学級集団、学部全体で取り組むものを授業名「生活」、課題別グループで取り組むものを授業名「グループ」として設定している。作業学習は、授業名を「作業」とし、3学年を縦割りにして3つの班を編成している。

(1) 生活単元学習

高等部の「生活単元学習」は、生徒一人一人の現在および想定される将来の生活（家庭、職場、余暇の場）をもとに目標や学習活動を設定し、実際的かつ体験的な学習を通じて生活する力を高めることを目指している。

学級単位で行う「生活」では、同じ学級の仲間と修学旅行や宿泊学習に向けた取組など共通の学習課題に取り組む中で、生活に必要な知識や技能を習得することや、協力する態度を育むことを重視している。

学部全体で行う「生活」では、行事単元が中心となっている。学部全体で取り組むことで、異なる生活年齢の集団での学習を通じて、責任感や集団性、自主性などを培うことを目的としている。

課題別にグループを編成して行う授業「グループ」では、主に将来や現在の家庭や余暇の場を見据えた個々の課題の解決を図る指導を行っている。学習集団は、生徒一人一人の課題に応じた3学年の縦割りグループで編成している。この課題別編成により、個別の課題に深く迫ることができ、きめ細かな指導を行うことができると考えている。本年度の研究は、この課題別グループで授業を実践し、まとめた。

(2) 作業学習

学習集団として、手工芸班、珈琲班、メンテナンス班の3つの班を設けている。各班は3学年の縦割りの集団として編成し、各班に1年間ずつ所属して、3年間で全ての班を経験できるようにしている。

高等部の作業学習では、卒業後の進路を見据えた指導を行っている。生徒の進路先は多岐にわたるが、高等部では、「働く力」として、「職場の上司や同僚との協調性」や「手指の巧緻性」、「報告・連絡・相談をはじめとするコミュニケーション能力」が重要であると考えている。これらは、どのような仕事でも必要とされる基本的な働くための資質であり、各作業班の特色を生かしながら、これらの育成を行っている。

1-2 学習評価の課題

今年度は、研究の3年目にあたる。高等部では、この研究に取り組み始める以前は、生活単元学習や作業学習の評価について、個々の年間指導目標を基に各指導形態の目標を設定し、その達成状況を評価してきた。そのため、各教科等の目標に対する学習評価については、個別の指導計画においてそれらを明確に記録する欄を設けてこなかった。これまでの研究の進展は以下の通りである。

1年目：「合わせた指導」の1時間単位の授業において、学習する教科等の目標・内容を明確化し、学習評価の方法や考え方を検討。

2年目：評価の対象を単元に広げ、学習評価の検討を継続。

1・2年次の研究の結果、以下の課題が明らかになった。

- ・単元間での学びのつながりを考慮することが難しい
- ・観点別評価の評価規準の設定に教員が慣れておらず、その適切さに不安を感じている
- ・学習評価に基づいた指導の改善の課題

一方で、「授業づくりのフレームワーク（1・2年次）」や「単元評価シート（2年次）」を活用することで、「何を」「どのように」評価するのか明確になったが、これまでの研究では指導内容や学習評価の整理にとどまり、「確かな学び」を目指した授業づくりには十分に踏み込めていなかった。そこで、今年度はこれまでの成果を活かしながら、高等部として『『確かな学び』を目指した授業づくりの要点』の整理を行うこととした。

2 今年度の取組

2-1 「単元を通して目指す姿」と『『確かな学び』を目指した授業づくりの要点』の設定

本校には、キャリア教育の視点として、生徒らが23歳～25歳時になったときの将来の姿を想定した「将来像」というものがある（巻末資料 P80 参照）。高等部では、各教科等の内容とその「将来像」を踏まえて、単元において生徒にどのような力をつけるべきかを検討し、「単元を通して目指す姿」を設定した。

また、その「単元を通して目指す姿」を達成するために、どのような授業づくりが必要であるかを検討し、高等部の教員がこれまでの実践から将来の生活へ向けた取組を出し合って「将来の生活につながる『確かな学び』を育むための授業づくりの6つの要点（以下、6つの要点）」として整理した。この「6つの要点」を授業づくりに意図的に取り入れることで、授業の中で「単元を通して目指す姿」を実現し、その姿を実際の生活場面においても見られるようにすることが、「確かな学び」であると考えた。以下に「6つの要点」を挙げた。

- | | |
|-----------------|------------------------------------|
| ・将来の生活を想定した環境設定 | ：生徒の将来の生活（家庭や職場）環境を想定した支援、指導の工夫 |
| ・活動に対する価値づけ | ：自分にとって価値のあるものだと思わせられるようにする工夫 |
| ・繰り返しの取り組み | ：活動をわかってできるようにする工夫 |
| ・他の活動との関連 | ：横断的に活動の習いを共有するための工夫 |
| ・ともに学べる場づくり | ：生徒同士で場や道具などを共有したり、協同的に学んだりするための工夫 |
| ・個に応じた支援 | ：各生徒の個別の教育的ニーズに応じた支援の工夫 |

この「6つの要点」は、特定の理論等に基づいたものではなく、高等部の授業の中で、実践を通して得られたものである。1学期に行った授業を振り返り、「単元を通して目指す姿」を達成するために意識していたことを高等部の教員間で意見交換し、その結果として6つの要点を整理した。この「6つの要点」は、必ず全てを取り入れなくてはならないものではなく、各単元において活用することで効果が見込まれるものを選び、授業づくりに活用することとした。具体的な実践については、以降の各グループの実践報告において詳述する。

2-2 「単元評価計画シート」の活用

昨年度までの研究を通じて作成された「授業づくりのフレームワーク」や「単元評価シート」を一部改訂し、「単元計画評価シート」が作成された。そして、その中には『『確かな学び』見取りシート』が新たに設けられ、単元終了後に生徒がどのような姿を示すかを想定し、授業で学んだことが実際の生活場面にどのように生かされているかを記録することとした。また、授業計画段階で、生徒の単元終了後の姿を教員間で共有し、適切なタイミングで「単元を通して目指す姿」の評価を行うこととした。以降の実践報告についても、この「単元評価計画シート」を用いて、学習内容や学習評価の明確化を図った。

実践報告 7

生活単元学習「おうち時間を充実させよう」

鈴木隆生・永島麻紀子



■高等部 A グループ

1 単元について

(1)単元観

生徒たちはこれまでの単元で、役割の分担をしながら協力して各活動に取り組んできた。本単元でも、役割分担と繰り返し積み重ねる活動を中心に据え、活動を進めることで、自分の役割を最後までやり遂げる姿を目指した。

本単元では、家事活動をテーマに取り組む。畑作りから野菜の収穫、必要な道具や材料の買い物、収穫した野菜を使った調理、道具の準備や片付けなど、一連の流れの中で多様な家事活動を経験できるようにする。この活動を通じて、生徒一人ひとりが自身の役割に主体的に取り組むとともに、家事の技能を身につけ、将来や日常生活に活かせるようにすることを目指している。

指導においては、生徒が自分のやるべきことや順番を把握しやすいよう、活動のスケジュールを視覚的にわかりやすく提示する。家事として行う活動の内容については、現在、生徒が家庭で行っている家事や保護者の希望をふまえて生徒ごとに設定し、活動量は繰り返しを通じて徐々に増やしていく。

(2)中心となる各教科等の目標・内容

各教科等	段階	内容のまとめり	
家庭	高1段階	A 家族・家庭生活	イ 家庭生活での役割と地域との関わり
理科	高1段階	A 植物の発芽、成長、結実	A 生命
国語	高1段階	A 聞くこと・話すこと	

(3)単元の指導計画

次	時数	学習活動	教科等	知	思	主
1	14	「家庭菜園をしよう」 ○買い物学習 ○畑作業（耕作、種まき、除草） ○植物の世話（水やり、間引き、追肥） ・じゃがいもやはつか大根の成長の様子を見たり触ったりしながら観察する。 ○汚れたものの洗濯、洗濯物干し、洗濯物たたみ	家庭	○		○
			理科	○	○	○
2	8	「収穫したものを調理しよう」 ○買い物学習 ○調理 ・家事活動を分担しながら取り組む	家庭	○	○	○
			国語		○	○
3	2	「ふりかえり」 ○畑の片づけ ○学習の様子を映像で見る、感想発表	家庭		○	○
			国語			○

2 学習評価と「単元を通して目指す姿」について

(1)対象生徒 G について

【単元についての実態】

2～3 工程の活動であれば、手本を示すことですぐに理解することができる。しかし、周囲の人や物により注意が散漫になりやすく、活動を継続する際には言葉かけを必要とすることが多い。また、自分が行うべきことや活動内容を理解していても、自分のやりたいことを優先して衝動的に行動してしまう場面も見られる。

簡単な言葉での指示や質問を理解し、行動したり返事をしたりできる場合もあるが、その一方で、状況によっては期待される反応を示さないこともある。言葉でのやり取りの中では、自分の直近の体験や思いを相手に伝えようとする姿勢が見られるようになってきたが、まだ常にその姿が見られるわけではない。また、簡単な質問に対して全く別の内容を話してしまうことも多い。他の生徒や教員に自ら話しかける様子が増えてきているが、一方的に自分の伝えたいことだけを述べる傾向があり、双方向のコミュニケーションには課題がある。このような状況を踏まえ、さらなる支援と指導が求められると考える。

【「単元を通して目指す姿」】

畑作業や家事などの活動に関する感想や思いを言葉で伝える姿

(2)『『確かな学び』を育むための授業づくりの要点』について

「単元を通して目指す姿」を達成するうえで本単元では6つの要点のうち①繰り返しの取り組み、②活動に対する価値づけ、③個に応じた支援の3つを重点にして単元計画を作成した。

対象生徒が活動内容を理解し、感じたことを言語化できるようになるには、以下の支援が必要であると考えた。まず、①収穫・調理・片付けといった一連の活動を繰り返し行う中で、生徒は自身の役割に取り組むようにする。その過程で、教員が活動の言語化を積み重ねることで、経験と言葉の結びつきが強まり、活動を通して感じたことを表現できるようになると考える。次に、注意が散漫しやすい特性を踏まえ、興味関心の高い活動を設定し、②活動に対する価値づけを行うようにした。対象生徒の好きな食べ物や使いたい道具を用意し「やりたい」という気持ちを引き出す工夫を行った。最後に、対象生徒が活動の流れを理解し、自身の役割を把握して取り組めるよう、視覚支援を用いて手順を整理し、わかりやすく提示することで活動の流れをスムーズに理解できるようにし、③個に応じた支援を充実させた。

(3)学習評価

表1 対象生徒 G の【家庭】の学習評価

【家庭】(中学部2段階) A 家族・家庭生活				
内容のまとめ		評価規準		単元の評価
イ 家庭生活と役割	(ア)	知	自身の役割に気づき、そのやり方を分かっている。	電子レンジやベジタブルカッターなどの道具を1人で使うことができた。使う道具を所定の場所に置いておくことで、開始の合図を聞くと自らその場に向かうことができた。
	(イ)	思	自ら担当の家事に取り組んでいる。	食器洗いで泡のついた食器を渡されると水で洗い流す事ができた。5秒数えながら水洗いし終わると泡がついていないか確認できた。 野菜のスライスは1人で進めることができた。
		主	よりよい生活のために、自分の役割を考えようとしている。	自分の役割を終えると、他の生徒の手伝いをしようとすることもあった。

表2 対象生徒 G の【理科】の学習評価

【生活】(小学部2段階) サ 生命・自然				
内容のまとめ		評価規準		単元の評価
サ生命・自然	(ア)	知	除草する雑草を見分けながら除草に取り組んでいる。	除草する際に、作物以外の雑草だけを抜くことができた。収穫時には作物だけを抜くことができた。
	(イ)	思	畑の変化に応じて水あげや除草などの活動を選択している。	教員が水あげをし忘れたという発言に反応し、「水あげしよう」と提案できた。雑草が生えていると自ら除草していた。
		主	自ら水あげや収穫、除草等の作業に取り組んでいる。	畑に着くなり除草をし始めていた。

表3 対象生徒 G の【国語】の学習評価

【国語】(中学部1段階) A 聞くこと・話すこと				
内容のまとめ		評価規準		単元の評価
A 聞くこと・話すこと		知		
	(イ)	思	教員とやりとりを重ねながら、活動に対する感想を考えている。	役割表を見ながら、自分が取り組んだ活動を選択することができた。 顔のイラストから笑顔のものを選択した。その後「楽しいはどれ？」という質問に同様のイラストを選択することができた。 自分の行った活動に適する「もの」と「うごき」のイラストを選び、その後イラストに対応する文字を選択し、正しく文章に並べることができた。
		主	自身の感想や考えを言葉で伝えようとしている。	活動中に「楽しい」や「やりたい」といった発言が見られた。「浅漬けをつくりたい」と前時の内容を踏まえて、やりたいことを言葉で伝えることができた。

(4)「単元を通して目指す姿」の評価

畑作業や家事などの活動に関する感想や思いを言葉で伝える姿

自身の役割に繰り返し取り組むことで、自分がどのような活動に携わるのかを理解し、主体的に取り組めるようになった。また、調理器具への関心が高く、使い方をすぐに覚え、一人で扱うことができていた。育てている作物の名称についても、文字の書き取りや葉の観察、実際の店舗で売られている場所を見ろといった活動を通じて覚えることができた。また、言葉のやり取りの中で作物の名称を正しく答えることができるようになった。感想発表の際には、その名称を用いて作物について言葉にする姿が見られた。

感想を訊ねられた際、はじめは「楽しかったよ」とだけ答えていたが、役割分担表を用いて自分の役割を視覚的にわかりやすく示したり、感想発表前に「自分が何をしたのか」を絵や文字から選択する形式で確認したりすることで、経験したことを言語化できるようになった。また、活動中には「やりたい」「楽しい」「食べたい」といった自分の気持ちを言葉にしながら取り組むことができるようになっていた。経験を後から言語化する際には支援を要するものの、活動中の体験や感じた思いを言葉にすることはできるようになってきた。



3 「確かな学び」について

■「確かな学び」の見取方法

生徒 G の「確かな学び」の姿として、「単元を通して目指す姿」が他の場面でもみられるようになることを設定した。具体的には、以下の2点を目標とした。

- ①その日に経験したことをやり取りの中で伝えることができること
- ②活動中に自分の気持ちを言葉で表出すること

見取の方法としては、担任を中心に、学部の教員全体で行動観察や感想を訊ねるやりとりを行うことにした。観察する場面は特に限定せず、気づいたことを随時記録し、担任に伝えるという方法をとった。

■「確かな学び」の評価

①午前中の授業について、昼休みに「何の授業だったのか」「何をしたのか」を質問した。委員会活動後に質問を行ったところ、授業名については時間割表を確認して答えることができた。しかし、「何をしたのか」という質問に対して、「整美委員会で何をしたの?」と尋ねると、「整美委員会楽しかったよ」と、質問の内容にそぐわない返答がみられた。そこで、いくつかの活動内容を選択肢として言語で提示すると、その中から「落ち葉拾いやったよ」と適切な内容を伝えることができた。

②体育で行ったバスケットボールでは、ゲーム形式の中で「いくぞ」や「がんばるぞ」といった意欲的な発言をする様子が見られた。このように、自身の興味関心のある事柄に対して感じた思いを言葉にして表出する姿が、様々な場面で見られるようになってきている。また、他の生徒に声をかける姿も増え、コミュニケーションを図ろうとする様子が見られるようになってきている。

4 本研究の成果と今後の課題

○成果

- ・「単元を通して目指す姿」を設定することで、教科等の目標と将来像の両方の要素を単元に取り入れることができた点が良かった。
- ・他の場面での見取りを設定したことで、単元内での指導方針がより具体的になり、指導のねらい等を共有することにもつながった。
- ・高等部の6つの要点を活用したことで、指導や支援の考え方に軸をもたせることができ、授業の組み立てがしやすくなった。また、何を意図した支援なのかが明確になった。
- ・6つの要点は実践に基づいて作られているため、高等部として大切にしたいポイントであることが示された点が意義深いと感じた。今後、実践を蓄積していくことで、これらのカテゴリがさらに洗練されていくことを期待する。

○今後の課題

- ・「単元を通して目指す姿」と各教科等の目標、将来像の関係をもう少し整理できるとよい。
- ・6つの要点に理論的な裏付けが加われば、今後もより自信をもって活用していくことができるだろう。

実践報告 8

生活単元学習「自分たちで考え、伝え合おう」

須田淳・齊藤可奈子



■高等部 Bグループ

1 単元について

(1)単元観

本グループでは卒業後の社会生活を見据えた授業に取り組んでいる。特に、他者との円滑なコミュニケーションをとることを重点的に取り組んできた。相手の立場を考えた言葉の使い方や、少人数でテーマを設けて状況に適した声量や応答の仕方など実践を通して学んできた。これらの経験を活かし今回は二人組を作り、協力して理科の実験を行い、結果を発表するという場面を設定した。自分の考えていることを相手に伝えたり、相手の話を受け入れたりする力を育てたいと考えた。

各ペアで異なる種類の実験を行うこととした。予想・実験・観察・結果をまとめる経験を通して、様々な事象に対して予想をする・見立てるという力をつけてほしいと考える。また、行った実験や観察が実生活にどのように結びついているかも、関連付けて学習に取り組んだ。

(2)中心となる各教科等の目標・内容

各教科等	段階	内容のまとめり	
国語	高1段階	A 聞くこと・話すこと	
理科	高1段階	C 物質・エネルギー	ア 物の溶け方
理科	高2段階	C 物質・エネルギー	イ 水溶液の性質
数学	中1段階	数と計算	ア 整数の表し方に関する数学的活動

(3)単元の指導計画

次	時数	学習活動	教科等	知	思	主
1	2	「考えて伝えよう」 ・自分の考えと相手の意見をまとめて発表する。	国語		○	○
2	1 2	「調べたことの意見をまとめよう」 ・予想、実験、結果をまとめる。 ・それぞれの活動をペアで行い意見をまとめる。	国語	○	○	
			数学	○	○	
			理科	○	○	○
3	2	「調べたことを伝え合おう」 ・調べてきたことを発表し、そのことについてお互い考えた意見を出し合う。	国語	○	○	
			理科		○	

2 学習評価と「単元を通して目指す姿」について

(1)対象生徒Ⅵについて

【単元についての実態】

自信のなさから声が小さく、人前で話すことが苦手である。対象生徒は3年生であるが1年生の頃からの課題でもあり、そのため本人も意識していて少しずつ声量は大きくなってきた。ただし、相手の立場に応じた言葉遣いや、間の取り方、他者が話しているときに自分の興味ある話題だと急に会話に入ってくるなど、卒業後の職場を見据えた場面でのコミュニケーションについては依然として課題がみられる。ペアでの活動については、相手を意識して協働するということが苦手なため、自分で全てを行ってしまうことが多かった。1年間を通して複数人で一緒に活動する取り組みを行ってきたことで、教員からの言葉がけが必要な時もあるが、他者のペースを考えながら一緒に活動できるようになってきた。

理科の実験は、通年で様々な分野の実験を行ってきたが、視覚や触覚など変化が分かりやすいものはとても興味をもって取り組む様子が見られた。また、各実験において結果の予想をするときは、自分なりの意見をとまとめて文章にすることができていた。

数学の学習内容では、数量についての苦手意識が強い。2桁の加減の計算になるとより苦手意識は強くなるが、ゆっくりと時間をかければ解くことができる。一方で立体の展開図や組み立てなど空間認識力は高く自信をもって行うことができる。簡単な文章題であれば、内容を読み取り解くことができる。

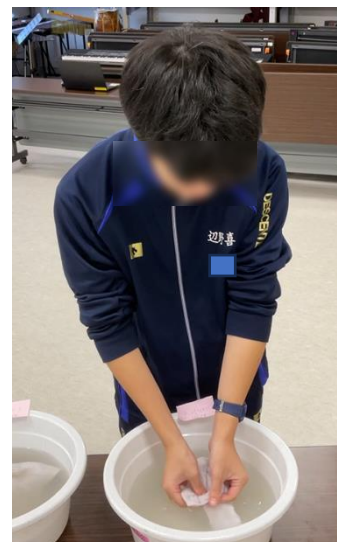
【単元を通して目指す姿】

- ・状況に応じた話し方（声量や間の取り方など）や質問内容を理解し応えることができる姿

(2)『『確かな学び』を育むための授業づくりの要点』について

人前で発表することや話すことへの自信のなさは、経験不足が要因の一つであると考え、実験したことを発表する機会を設けた。発表会という形式にすることで保護者の方にも参観していただき、より多くの人に聞いてもらえる場面を設定した（活動に対する価値づけ）。また、ペアを組んでの実験とすることで、一人で進めるのではなく、相手と歩調を合わせて進めていくように促した（ともに学べる場づくり）。理解しているところは一人で進めてしまう様子も見られるため、進捗状況を生徒同士で確認できるよう実験の手順をプリントで提示することにした。確認する際にはお互いのプリントを見合わせて、言葉を交わしながら行うように促した。発表の際には、教員が用意した発表原稿の枠に、自分の言葉で記録し、ペア同士で相談しながら結果をまとめる形式をとった。本単元ではペアで話し合う場面を取り入れ、まとめたシートやスライドを全体で発表することにし、話し合ったり人前で話したりという機会を多く設定した（繰り返しの取り組み）。

実験テーマとして生活に即した内容を用意し、洗剤の溶け方・食材の溶け方・静電気の防ぎ方・リングが変色しない方法といった4つのテーマを設定した（他の活動との関連）。8名4ペアの生徒に、視覚的に分かりやすい実験や触覚に訴えかける実験など生徒の実態に応じて分かりやすい内容を選択した（個に応じた支援）。



(3)学習評価

表1 対象生徒Vの【国語】の学習評価

【国語】（高等部1段階）				
内容のまとめ		評価規準		単元の評価
A 聞くこと 話すこと		知		
	A エ	思	相手に伝わるように、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などを工夫している。	発表の際には、相手に伝わるように大きな声ではっきりと伝えることができた。聞きやすいように文章を続けて読むのではなく、間の取り方に気をつけながら話すことができていた。実験結果については自信をもっていることもあり、強弱をつけて発表することもできた。
		主	言葉がもつよさを認識するとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとしている。	ペアで実験を進める際には、自分の考えを伝えながらも相手の意見をしっかりと聞こうとする姿勢が見られた。

表2 対象生徒Vの【理科】の学習評価

【理科】（高等部1段階） C物質・エネルギー				
内容のまとめ		評価規準		単元の評価
ア 物の 溶け方	(ア) ㊦	知	物が水に溶ける量は水の温度や量、溶ける物によって違うことに気づいている。	粉洗剤をとかす実験では、①温度は一定にして洗剤の量を変える②洗剤の量は一定にして水温を変えろという実験を行った。様々なパターンで行い、それぞれ洗剤の溶けやすさや粒の残り具合について、感触を確かめながら記録を取った。それぞれ比べることで、条件によって物の溶け方が異なることに気付くことができた。
	(イ)	思	物の溶け方について調べる中で、物の溶け方についての予想や仮説を基に、解決の方法を考え、表現している。	洗剤の溶け方については、溶けやすい洗剤の量と水温の予想を立ててから実験を行った。実験を通して、見立てたことがあっているのか、間違っているのか、洗剤の溶けた様子を言葉にしながらか記録を取ることができた。その中で一番溶けやすい方法を見出すことができた。
		主	物の溶け方について学んだことを生活に活かそうとしている。	物の溶け方については、他のグループの発表も聞いて、食べ物や洗剤には溶けやすい量と水温があり、正確に決められた量を計量して入れることの大切さに気付いた。

(4)「単元を通して目指す姿」の評価

発表会の際には、聞いている人たちを意識してなるべく相手を見て話すようにしていた。また、本人が「発表会」ということを強く意識して、いつもより声をはり、大きな声を出そうとする様子が見られた。相手に説明を理解してもらおうと一文一文ゆっくりと、丁寧に読む様子も見られた。結果を予想し、自分たちで実験を行い、まとめるという活動が本人にとっても自信になったようで、発表する際には自分の意見としてまとめ、伝えることができていた。ペアで意見を出し合う際には、聞き取りやすい声量で話す様子や相手が言葉に詰まってもじっくりと話を待つ様子も見られた。友達とのやり取りの中で質問する様子や、自分の意見をまとめてから伝える様

子も見られた。

3 「確かな学び」について

■「確かな学び」の見取方法

生徒Vの「確かな学び」の姿として、「単元を通して目指す姿」が他の場面でも見られるようになるということを設定した。具体的には、

- ・様々な授業場面で、発表するときに適切な声量で話す姿
- ・友達へ言葉かけをするときに適切な言葉を使って話す姿

とした。見取りの方法としては、学部の教員で様々な場面の行動観察を行った。気づいたことを記録して共有できるようにした。

■「確かな学び」の評価

年度当初から本人も大きな声で話すことを課題としてとらえていたこともあり、今回の単元をきっかけとして、意識して場面に応じた声量で話すことができるようになってきた。特に体育のバスケットボールの試合中は、今まであまり友達へ言葉かけをすることがなかったが、試合の状況を見て積極的に友達へ言葉かけをする様子が見られた。また、これまでは自分の感情を言葉にすることが見られなかったが、試合中に自分の感情を言葉にして大きな声で言う様子が見られた。その他の場面では、クラスの友達と共同で作業する際に、これまでは一人で進めたり傍観したりする様子が見られたが、自分から友達に声をかけたり、協力したりする活動しようとする様子が見られた。人に話しかけるということに対して自信がついてきたようで、教員や友達からの質問に対して今まで以上に積極的に発言をするようになってきた。疑問に思ったことを質問するときも今までは独り言のようにつぶやいていたが、自分から「先生、質問よろしいですか」と聞くことができるようになってきた。

4 本研究の成果と今後の課題

○成果

今回の「単元計画評価シート」を通して、生活単元学習の中で、本単元において主となる教科等が明確になり、教科等に応じた指導と対応して学習評価を行うことができたことがよかった。また、高等部ではグループ学習として4グループを編成しているが、主となる教科等が共通となることで他のグループの授業を見聞し、互いに「単元計画評価シート」を参考にすることで、教員自身の各教科等の見方・考え方の理解が深まった。

目指す姿を見取ることに限っては、この「単元計画評価シート」があることで学部の教員で共有することができた。自分が見ていない場面でも同じ視点で他の教員が見取ることができ、生徒の成長を教員間で共有することができた。目指す姿を設定することで、本単元で教科等としてつけたい力が明確になった上で、身に付けた力をどのように活かしていくのかという「確かな学び」を設定できたのは良かったと思う。

○今後の課題

教科等の目標設定と目指す姿の目標設定の方法に難しさを感じた。個人に起因する目指す姿の目標設定と高等部のカリキュラムとの間に矛盾が生じないように設定する難しさを感じた。

また、今回はこのような「単元計画評価シート」を使うことで、生活単元学習において教科別の指導と評価を明確にすることができ、目指す姿ということも設定することができたが、本研究の取り組みをどのようにして今後も日々の授業に取り入れ活用していくのが課題であると感じた。

実践報告 9

生活単元学習「自分の役割を果たそう」

渡部真由子・峯岸誠



■高等部Cグループ

1 単元について

(1)単元観

将来の生活を見据え、生活の基本である掃除や洗濯、食事の準備を自分の力でできるようにするため、本単元を設定した。これらの生活的な自立を促すことで、グループホームや家庭ですべての家事を誰かにやってもらい生活するのではなく、自分でも積極的に取り組むことができるようになることで、より自立する生活を送ることができる考えた。また、この単元における学習を、家庭とも連携して実践してもらうことで、自分の役割を理解し、様々な状況に応じて、自立して日常生活を送る力が養われると考えた。本単元では、それぞれの学習活動を通して、個々の生徒の実態や将来像を踏まえ、自立への一歩となるよう、目的や目標を明確にし、主体的に活動に取り組む力や自ら工夫する力を伸ばしていきたい。単元終了後には、学習した内容を実生活で生かす場面を設定し、自分の生活が家庭と深く関わっていることを認識したり、自分の成長を自覚して実践する喜びに気づいたりする活動を充実させていく。更に、人生を充実させるためには余暇も重要であることを理解し、グループホームでの共同生活を想定して、仲間との関わりの中で、余暇の過ごし方について考えられるよう指導に取り組んでいきたい。

(2)中心となる各教科等の目標・内容

各教科等	段階	内容のまとめ	
家庭	高1段階	A 家族・家庭生活	イ 家庭生活での役割と地域との関わり
国語	高1段階	A 聞くこと・話すこと	
理科	高1段階	C 物質・エネルギー	ア 物の溶け方

(3)単元の指導計画

次	時数	学習活動	教科等	知	思	主
1	2	「自分の役割を知ろう」 ○自分や家族の家庭での過ごし方を振り返る。 ○将来の自立へ向けて必要な力に気付く。	家庭	○		
2	7	「自分の役割を果たそう～練習編～」 ○掃除の計画を立て、練習する。 ○洗濯の計画を立て、練習をする。 ○昼食メニューの選択、練習、試食をする。 ○余暇を話し合って決める。 ○「C グループホームの生活をしよう！」の計画表を作る。	家庭		○	○
			国語		○	○
			理科		○	○
			家庭		○	○
3	5	「自分の役割を果たそう～実践編～」 ○計画表通りに掃除、洗濯、昼食準備、余暇を行う。 ○C グループホームの生活をしようを振り返る。	国語		○	○
			理科		○	○
			家庭		○	○

2 学習評価と「単元を通して目指す姿」について

(1)対象生徒 F について

【単元についての実態】

話すことを好み、特に教員に対して積極的に関わろうとする活発な様子が見られる。一方、将来グループホームで生活したいと考えているが、学校生活では自信のなさや時間を意識することの難しさから、掃除や教室以外の場所への移動時などに自分から行動を起こすことが難しい場面が多く見られる。行動を起こすきっかけとして、教員から促されると取り組めることが多い。

家庭での役割として、家自分の洗濯物たたみや食器洗いは行うこともある。学校では、階段掃除は教員からの言葉かけなどを受けて取り組んでおり、係活動には責任をもって自ら取り組むことができている。学校や家庭のいずれにおいても、毎日取り組んでいる活動はあるものの、掃除や洗濯、調理といった家事活動の経験は十分とは言えない現状がある。

【単元を通して目指す姿】

掃除や洗濯、調理などの与えられた役割に、支援を受けて一人で取り組むことができる姿

(2)『確かな学び』を育むための授業づくりの要点について

「将来の生活につながる『確かな学び』を育むための授業づくり」の6つの要点の中から、主に3つの要点を授業に盛り込んだ。「活動に対する価値づけ」では、グループホームを見学した教員が話をしたり、写真を見せたりすることで具体的なイメージをもてるようにした。また、11月に学習した「ものをとかそう」の単元で得た知識（理科 高1段階 C物質・エネルギー ア物の溶け方 知（ア））を活用し、洗濯や掃除で洗剤を溶かす作業を実生活に生かせるよう、本単元に取り入れた。「繰り返しの取組」では、単元内で掃除、洗濯、調理を練習した後、グループホームを模した学習活動を設定し（以下、「C グループホーム」）、繰り返して取り組める内容にした。また、冬休みに、授業で行った家事を中心に、家庭でも取り組めるようチェックシートを使い、確かな学びを見取れるようにした。「ともに学べる場づくり」では、単元を通して話し合い活動を多く入れ、仲間の意見を聞いて取り組むことができるようにした。2つのグループに分かれて実験をしたり、話し合い活動の中で余暇や一日の流れを決めたりすることで、より「C グループホーム」の一員としての自覚を持ち自分の役割を果たせるよう設定した。

(3)学習評価

表1 対象生徒 F の【家庭】の学習評価

【家庭】（高等部1段階） A 家族・家庭生活				
内容のまとめ		評価規準		単元の評価
イ 家庭生活 と役割	(ア)	知	家庭における役割について学び、理解している（ワークシートに記述している）。	家庭での家事分担の必要性を理解するとともに、将来グループホームでよりよい生活をしていくために必要な家事能力を知り、自分の役割を果たすことの大切さを理解することができた。
	(イ)	思	掃除・洗濯・調理に関して、家族の一員として自分の果たす役割を考え、自分で行っている。	掃除・洗濯・調理の活動を通して、自分がどの役割を果たせばいいのかを考え、支援を受けながら一人で行うことができた。掃除では自分で選んだ洗剤を使い、適切な場所をきれいにすることができた。
		主	仲間とのやりとりを通して、よりよい生活の実現に向けて、家	教員の言葉かけによる支援を受けながらも、仲間とのやりとりの中でグループ内での最善の方法を探し、家事を行うことができた。

			事や余暇の過ごし方を工夫しようとしている。	
--	--	--	-----------------------	--

表2 対象生徒Fの【国語】の学習評価

【国語】（高等部1段階） A 聞くこと・話すこと				
内容のまとめ		評価規準		単元の評価
A 聞くこと・話すこと		知		
	オ	思	話し合い活動で、仲間の話にも耳を傾け、自分の考えを伝えている。	余暇や掃除、洗濯を行うにあたって、話し合い活動を積極的に行った。発言はできたものの、仲間の意見を最後まで聞き、それを取り入れることは難しかった。
		主	話し合い活動に積極的に参加しようとしている。	初めは少し消極的だったが、何度も話し合い活動を重ねるごとに、与えられた課題に対して積極的に話し合うことができるようになった。仲間の意見を踏まえた上で、意見を出すことができた。

表3 対象生徒Fの【理科】の学習評価

【理科】（高等部1段階） C 物質・エネルギー				
内容のまとめ		評価規準		単元の評価
ア 物の 溶け方		知		
	(イ)	思	水に溶けづらい洗剤はどうしたら溶けやすくなるかを考え、実験を通して調べたり、実際に家事の場面で実行したりしている。	粉末洗剤は水とお湯ではどちらが溶けやすいかをグループの仲間と実験を通して調べ、実際に選んだ洗剤を使って洗濯することができた。また、クエン酸や重曹を溶かして、それぞれの洗剤に合わせて最適な箇所の掃除を行うことができた。
		主	洗剤の溶け方の実験を通して、実験結果を基に家事の場面で生かそうとしている。	クエン酸と重曹を溶かして手作り洗剤を作り、それぞれの洗剤にあった場所を掃除することができた。洗濯用粉末洗剤をお湯で溶かすことによって、よりよく洗濯することができた。

(4)「単元を通して目指す姿」の評価

家庭での家事分担の必要性を知り、将来に向けて必要とされる家事や、自分の役割を果たすことの大切さを理解することができた。教員の言葉かけによる支援を受け、話し合い活動を通じて、仲間とやりとりを通して、協力して家事を行うことができた。掃除では、自分でクエン酸を水に溶かしてクエン酸水を作り、用いる場所を適切に選択・判断して、きれいにすることができた。洗濯では、粉末洗剤が水とお湯のどちらが溶けやすく、洗剤残りが少ないかを実験を通じて調べ、選んだ洗剤を使って洗濯することができた。調理では、食べてみたいレトルト食品を自分で選び、電子レンジを使用して調理することができた。また、仲間の調理したものを試食することで、レトルト食品の種類の多さを知り、より身近に感じることもできた。「C グループホーム」での1日のスケジュールや余暇の計画を決める話し合い活動では、当初は消極的な姿勢が見られたが、徐々に積極的に意見を出すことができるようになり、様々な提案をすることができた。

3 「確かな学び」について

■「確かな学び」の見取り方法



- ・朝の清掃の取組の様子を観察する。
- ・冬休みに取り組めるよう計画し、家庭での取組の様子を聞き取る。

■「確かな学び」の評価

冬休みに家庭で家事に取り組むことで、見通しが立ち、自信をつけることができた。その結果、より自主的に家事に取り組む姿が見られるようになった。グループでの掃除の取組をきっかけに、朝の掃除時間にも自主的に取り組む姿が見られるようになり、12月からはチェックシートを使って自己評価を行った。以前は毎朝の着替えや係活動に取り掛かるまでに時間がかかり、掃除の開始時間に間に合わないことが多かったため、時間の使い方について振り返りを実施した。チェックシートを使って振り返るうちに、自分の課題や改善点が明確になり、次の日の目標を具体的に立てることができるようになった。その結果、朝の支度から掃除までの一連の活動に対する前向きな姿勢が徐々に見られるようになった。3学期には、時間管理だけでなく掃除内容にも意識を向けながら取り組む姿勢が確認でき、大きな成長が感じられた。

冬休みに、家庭で家事に取り組んだ。家事の取り組みを冬休みに毎日記録してもらった。単元に取り組むまでは、家での家事は週末に朝食後の食器洗いや自分の分の洗濯たたみを担当していたが、冬休みは週末だけではなく、食器の洗い物や家族のコーヒー入れ、買い物など家事の幅が広がり自分から取り組む姿勢が見られるようになった。今後も様々な家事にチャレンジし、自分から取り組んでいけるとよい。



4 本研究の成果と今後の課題

○成果

- ・「単元計画評価シート」を使用することで、各教科の内容や評価の観点を意識して授業を改善することができた。また、経過の記録を行うことで、単元中に指導や支援方法の改善を図りながら授業を展開していくことができ、単元の評価もしやすくなった。複数の教科を効果的に取り入れることでその結果、実際の生活に即した単元内容になった。
- ・「授業づくりの6つの要点」を確認しながら単元の計画をすることで、日頃の学習活動との関連や他の教員との共通認識をもって指導にあたることができた。学部で足並みをそろえて、目指す方向性を定めることができた。
- ・将来像が組み込まれた目指す姿を設定することで、現場実習のケース会議や高等部の長期目標と関連付けながら、卒業後の将来を見据えた一貫した指導を行うことができた。

○今後の課題

- ・各教科の内容をしっかりと抑えることが重要だと考える。バランスよく学習内容や目標を設定していけるようにしたい。
- ・「授業づくりの6つの要点」だけでは将来の実生活につながる学習のために必要なことや考慮すべきことが不十分だと考える。単元中や単元後の学校生活を振り返りつつ、よりよい授業づくりを今後も更に進めていく必要がある。
- ・「単元計画評価シート」を、負担になり過ぎないように効率的に考え、効果的に活用していけるようにしたい。

生活単元学習「余暇活動を楽しもう～足湯～」

平田祐也・松岡加織



■高等部 D グループ

1 単元について

(1)単元観

本単元では、生徒らに幅広い活動に興味をもって取り組んでほしいと考え、「余暇活動」というテーマを設定した。友人等とかかわりながら自分の好きな活動に参加し、有意義な余暇を過ごしてほしいと考え、「余暇活動」を充実させるための単元に取り組む。

これまで「余暇活動」の学習では、「カラオケ大会」「ボッチャ」「バーベキュー」に取り組んできており、生徒が実際にやってみたいことを考え、実施することに喜びややりがいを感じる様子が見られた。本単元では、教員に対して、教員自身が普段行っている「余暇活動」について、アンケートとインタビューを行い、そこから得られた回答を参考にして、生徒らがやりたいと考えた「温泉」を取り上げた。

教員へのインタビューで得た「自分の気持ちいいと感じる温度を探してみるといい」というアドバイスを元に、水温を計測しながら「気持ちいい足湯づくり」を行った。繰り返し同じ活動に取り組む中で、自分で考えて取り組んだり、困難に対処したりできるようすることを期待した。相手を思いやる気持ちを育成するために、ペアで相手に合わせたり協力したり考えを伝えたりしながら活動する場面を設定した。単元での学習を自分の生活と関連させながら振り返ることで、将来の「余暇活動」の充実に繋げていく。

(2)中心となる各教科等の目標・内容

各教科等	段階	内容のまとめ	
家庭	高1段階	A 家族・家庭生活	ウ 家庭生活における健康管理と余暇
理科	中2段階	C 物質とエネルギー	ア 水や空気と温度

(3)単元の指導計画

次	時数	学習活動	教科等	知	思	主
1	1	「水の温度の測り方」 ○水温計の使い方を理解する。	理科	○		
2	2	「気持ちいい温度を探そう」 ○計測した水温と体感について調べる。 ○氷やお湯を使って水温の調整の仕方を知る。	理科	○	○	
3	5	「足湯を作ってみよう・入ってみよう」 ○七輪で沸かしたお湯を使って足湯をする。 ○友達と一緒に足湯を楽しむ。	理科			○
			家庭	○	○	
4	1	「振り返り」 ○足湯の良さややってみた感想を発表する。	家庭			○

2 学習評価と「単元を通して目指す姿」について

(1)対象生徒 T について

【単元についての実態】

明るい性格で、人とかかわることが好きである。興味をもち、楽しいと感じる学習には積極的に取り組み、自分から話をするが増える傾向がある。同性の友達を好み、学級やグループでは特定の友達と一緒に活動したがることが多いが、グループ内の他の友達ともかかわりがもてるようになってきている。思いや考えを言葉で表出することがうまくできずに気持ちの切り替えに時間がかかることがあるが、教員との言葉でのやり取りができるようになってきたことで、気持ちの切り替えにかかる時間も短くなってきている。

温度や気温に関して、日常の経験から理解しているものの、冬に半袖を着るなど、認識と体感には差が見られる。

余暇活動として、日ごろからダンスサークルに通っており、外部とのかかわりも多い。また、家族で出かけたり旅行をしたりすることもよくある。

【単元を通して目指す姿】

- ・学習内容に関連した自分の考えや気持ちを伝えながら、仲間と一緒に活動に取り組んでいる姿

(2)『『確かな学び』を育むための授業づくりの要点』について

目指す姿を達成するうえで本単元では「将来の生活につながる授業づくりの6つの要点」のうち①繰り返しの取り組み、②活動に対する価値づけ、③ともに学べる場づくりの3つを重点にして単元計画を作成した。

「繰り返しの取り組み」では、「余暇活動」という共通のテーマのもと、前単元と関連した活動を取り入れ、繰り返しの中で自信をもって活動に取り組めるようにした。具体的には、前単元の「バーベキューをしよう」で行った七輪での火起こしを本単元でも活用し、毎授業でまず火起こしから始めることで、自信をもって授業に臨めるようにした。

「活動に対する価値づけ」では、学習に前向きに取り組めるように、「余暇活動」に関するアンケートやインタビューを通して本人がやりたいと考えた学習活動を設定した。

「ともに学べる場づくり」では、ペアでの活動場面を多く設定し、仲間と一緒に楽しく活動に取り組む中で、自然と言葉でのやり取りができるような環境設定を行った。

(3)学習評価

表1 対象生徒 T の【家庭】の学習評価

【家庭】（高等部1段階） A 家族・家庭生活				
内容のまとめ		評価規準		単元の評価
ウ 家庭生活における健康管理と余暇	(ア)	知	余暇としての足湯の良さに気づき、実践している。	足湯が「楽しい」「気持ちいい」と感じることができ、前向きに足湯の活動に取り組むことができた。

	(イ)	思	足湯の良さや感じたことについて考え、表現している。	「気持ちいい」「眠くなる」など自分が感じたことだけでなく、「友達と話をしながらやると楽しい」ということにも気がつき、言葉で伝えることができた。
		主	余暇として、よりよい足湯にするための方法を考え、工夫している。	「自分の好きな温度にすること」と「友達と話しながらやること」の2つがよりよい足湯にするためのポイントだと考え、それを実現させるために、道具や場所を工夫しながら取り組むことができた。

表2 対象生徒Tの【理科】の学習評価

【理科】(中学部2段階) C 物質とエネルギー				
内容のまとめ		評価規準		単元の評価
ア 水や空気と温度	①	知	水は、温度によって水蒸気や氷に変わること気づいている。	氷が冷たいということが理解できた。お湯を温める途中で「シュー」と発言し、湯気に気づくことができた。
	(イ)	思	水の温度や状態の変化について調べる中で、気づいたことを伝えたり表現したりしている。	35度前後がちょうどいい温度だと気づき、伝えることができた。水温を調節する中で、氷を入れたい、もっと暖かくしたいなど、伝えながら取り組むことができた。
		主	水の性質について気づいたことや学んだことを足湯づくりに生かしている。	これまでの経験をもとに、温かいお湯を加えながら35度～38度の足湯を作ることができた。

(4)「単元を通して目指す姿」の評価

○学習内容に関連した自分の考えや気持ちを伝えながら、仲間と一緒に活動に取り組んでいる姿

足湯に取り組む中で、水温を気にしながら数値や感じたことを教員に伝える姿が見られた。はじめのうちは、「冷たいのが気持ちいい」と言って、20℃程度の水で行っており、その際に、温度を下げるために「氷がほしい」と教員に伝え、水温を調節していた。学習を進める中で、友達が40℃程度のお湯に浸かっているのを見て、自分も同じくらいの温度にしたいと伝え、自分の足湯が暖かくなるように調節していた。



水温と体感を結び付け、自分の考えや気持ちを教員や友達に伝えながら一緒に活動することができた。

一人用の小さな桶に足を入れながらも、温かいお湯を友達の桶にも入れて、気持ちいいという感覚を共有しようとしていた。みんなで足湯をする中で、友達とおしゃべりしながらだと楽しいという発言が見られた。



3 「確かな学び」について

■「確かな学び」の見取方法

生徒 T の「確かな学び」の姿として、本単元を通して目指す姿が他の場面でもみられたかを見取るために以下のような具体的な姿を設定した。

- ①周囲の仲間と言葉でやり取りしている姿
- ②仲間とかかわりながら活動している姿

見取の方法としては、各授業の担当教員を中心に、学部の教員全体で行動観察を行うことにした。

■「確かな学び」の評価

- ①これまでは、相手によって朝の挨拶の仕方に差が見られたが、自分から担任以外の教員や他クラスの生徒にもする姿が見られた。着替えの際には、不安なことなどを言葉にして教員に相談する姿が見られ、教員とやり取りを通じて、教員からの提案を受け入れて行動することができた。委員会では、これまで教室や活動に入れないことが多かったが、教員とのやり取りを通して折り合いをつけ、活動に参加することができるようになった。
- ②本グループの学習で特にかかわりの多かった生徒とは、体育でも自分からペアを作って活動することができた。これまでは、一方的なかかわりも見られたが、会話をしながら楽しくかかわることができ、相手も好意的な様子が見られた。他のグループとの合同授業では、他のグループの生徒にも自分から誘いかけることができた。

4 本研究の成果と今後の課題

○成果

- ・「単元計画評価シート」を活用することで、単元を通して生徒が何を学ぶかが明確になり、指導の改善が図れた。
- ・本単元で目指す姿を明確にしたことで、毎時間の学習評価及び授業の改善が図れた。
- ・単元後の般化を見据えたことで、より具体的に体験的な学習活動を設定しようとする意識が高まり、授業の改善を図ることができた。
- ・「授業づくりの6つの要点」として、これまで行ってきた指導・支援を言語化することで、教員間の共通理解を図ることができた。

○今後の課題

- ・実践ベースで作成した授業づくりの6つの要点について、実践を積み重ねることでより具体的に根拠のあるものに改善していけるとよい。
- ・教科等の内容を踏まえつつ、生徒の興味関心や学びたいという気持ちを大切に、具体的に体験的な学習を今後も行っていけるとよい。

Ⅲ 研究のまとめ

1 『確かな学び』を育むための授業づくりの要点』の成果

高等部では、『確かな学び』を育むための授業づくりの要点』として、「将来の生活につながる『確かな学び』を育むための授業づくりの6つの要点」（以下、「6つの要点」）を作成した。これは、高等部の教員がこれまでの実践から将来の生活へ向けた取組として大切にしていることを挙げ、その指導・支援の考え方をカテゴリー化してまとめたものである。

この、「6つの要点」を活用して授業を実践した結果、以下のような意見が挙げられた。

- 支援を考える際の視点となって、授業を考えやすくなった。
- 学部として大切にしたいことが明確になった。
- 「6つの要点」をベースに、実践しながら教科等の学びを深めるために改善していけると良い。

「6つの要点」は、高等部教員の授業実践を基に作成されており、将来の生活へ向けた取組の工夫を整理したものであるため、今後さらに実践例を集め、内容や項立ての整理をしていくことで、より確かな支援の根拠として機能していくと考える。

また、「6つの要点」の各内容は、普段当たり前のように取り組んでいるために意識されにくいものも多い。上記の意見からは、こうして要点を可視化することで、それぞれの内容が改めて意識されるようになったことがわかる。授業づくりの要点を可視化することは、支援・手立ての充実を促し、「確かな学び」を育む授業づくりにつながると考えられる。

2 「単元計画評価シート」活用の成果

2-1 計画・評価の明確化

今年度は、単元計画の作成および学習評価を記録「単元計画評価シート」を表計算ソフト Excel で作成し活用した。「単元計画評価シート」は、以下の4つのシートから成るファイルにまとめた。

- 単元計画シート : 単元全体の計画と評価を整理するためのシート
- 単元評価シート : 学習の過程の記録と単元評価のためのシート
- 授業計画・評価シート : 1時間ごとの計画と評価規準を整理するためのシート
- 「確かな学び」見取りシート : 生徒の学びの様子を見取るためのシート

これらのシートを活用して各教科等の目標や学習評価を明確化し、「確かな学び」を育む授業作りを実践した。この「単元計画評価シート」を用いた成果について、以下のような意見が挙げられた。

- 記入のしやすさ : 記入する内容が明確であり、書きやすかった。
- 目標・評価の明確化 : 授業の目標や評価規準が整理されたことで、授業がスムーズに行えた。
- 評価のしやすさ : 各教科の評価規準が明確になり、単元を通した評価を行いやすくなった。
- 振り返りの実効性 : 記入には手間がかかったものの、毎時間の振り返りをシート上で行えたため、単元の評価が容易になった。

本研究では当初から、「合わせた指導」における各教科等の取り扱いや学習評価の在り方について検討を行ってきたが、研究初期は、単元計画や学習評価の捉え方などに対する共通理解はあまり深まっていなかった。しかし、学部内の意見からは本研究への取組を通して、学習指導要領に対する教員の理解が深まり、学習評価を踏まえた単元計画を立てやすくなったり、学習状況を評価しやすくなったりした様子がわかる。「単元計画評価シート」の活用に対しても、このような教員の理解の深まりが好意的な意見につながったのではないかと考えられる。

「単元計画評価シート」の活用により、「何を」「どのように」学ぶのが明確になったこと、生徒の取組の状況を観察し、単元計画を柔軟に修正するようになったことで、生徒の学びをより確かなものにする授業づくりに近づくことができたと考える。

2-2 「確かな学び」の実現に向けた取組

高等部では、卒業後の生活を見据えて、「単元を通して目指す姿」の設定に「将来像」（巻末資料P〇〇参照）の視点を加えた。学習指導要領に基づく各教科等の学習内容に、個々の「将来像」に基づく具体的な姿を重ね合わせ、学習活動を通じてその両方を達成する姿を明確にすることで、生徒一人一人に応じた授業づくりを目指した。

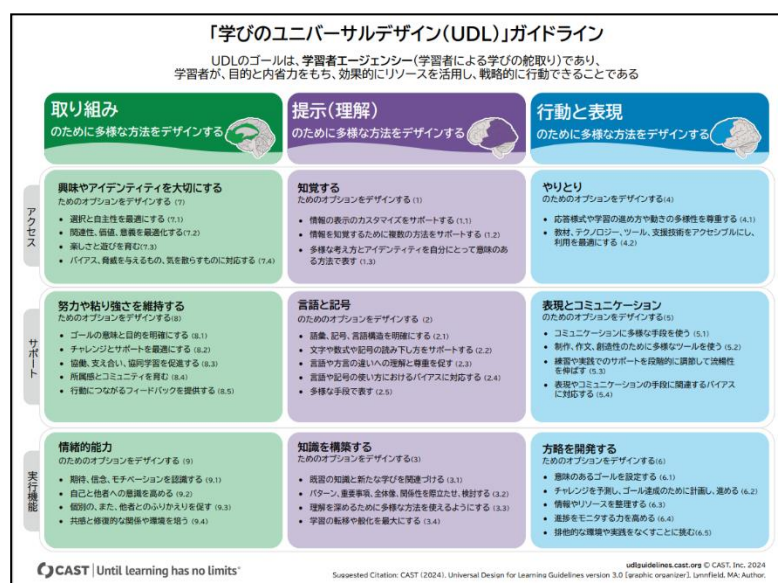
また、「確かな学び」の評価を行うために「単元計画評価シート」を活用し、「単元を通して目指す姿」が同じように発現されると予想する具体的な場面を事前に想定した。これにより「確かな学び」へ向けた取組むがより具体的になった。

これまでも、現場実習における生徒の評価と課題については、個々の生徒にケース会議をもち、現場実習で得られた学びを他の場面でどのように見取るのかについて議論してきた。学年の枠を超えた縦割りの活動が多い高等部では、本研究の取組を通して、生活単元学習においても現場実習と同様にも、単元後の場面を想定し、教員間で話し合いをもったり、検討を重ねたりしたことで、指導方針やねらいを共有し、教員間で共通理解を深めることができた。

3 今後の実践に向けての課題

3-1 UDLの視点から考える6つの要点とその課題

前期の授業実践を通じて、「『確かな学び』を育む授業づくりの要点」を6つにまとめることができた。上記の



成果でも述べたように、この「6つの要点」を活用することで確かな学びに向けた授業づくりにおける支援・指導の充実を促した。

しかし、この「6つの要点」以外にも、生徒の将来の生活につながる授業づくりの視点があるのではないかと、また、この6つのカテゴリー分けが妥当であるかどうかについては、依然として検討の余地があり、より「確かな学び」へ向けた授業づくりを行うために、今後も検討を重ねる必要がある。

「6つの要点」については、研究協議会で、指導助言者から「学びのユニバーサルデザイン（以下、UDL）」の視点を踏まえた指導

をいただいた。CAST（2024）による、UDL のガイドライン（図1）は「提示」「行動と表出」「取り組み」の3つの原則があり、各原則はいくつかのガイドラインに分かれている。このガイドラインには、それぞれにチェックポイントがあり、授業において学習者の学びの障壁を取り除くために必要に応じて適用していくものである。指導助言者からは「6つの要点」とUDLのガイドラインと照らし合わせると、いくつかの合致点があり、UDLが「6つの要点」の理論的根拠となりうるのではないかとということが示唆された。以下に、その合致点について表1にした。

表1 6つの要点とUDLのガイドラインの類似点

将来の生活につながる「確かな学び」を育むための授業づくりの6つの要点	ガイドライン	チェックポイント
将来の生活を想定した環境設定	ガイドライン7 興味やアイデンティティを大切に するためのオプションをデザインする。	・ 選択と自主性を最適にする（7.1） ・ 関連性、価値、意義を最適化する（7.2） ・ 楽しさと遊びを育む（7.3）
活動に対する価値づけ		
繰り返しの取り組み	ガイドライン5 表現とコミュニケーションのため のオプションをデザインする。	・ 練習や実践でのサポートを段階的に調節して流暢性を伸ばす
他の活動との関連	ガイドライン3 知識を構築するためのオプション をデザインする。	・ パターン、重要事項、全体像、関係性を際立たせ、検討する（3.2） ・ 学習の転移や般化を最大にする（3.4）
ともに学べる場づくり	ガイドライン8 努力や粘り強さを維持するための オプションをデザインする。	・ 協働、支え合い、協働学習を促進する（8.3） ・ 所属感とコミュニティを育む（8.4）
個に応じた支援	ガイドライン4 やりとりためのオプションをデザインする。	・ 応答様式や学習の進め方や動きの多様性を尊重する（4.1） ・ 教材、テクノロジー、ツール、支援技術をアクセシブルにし、利用を最適にする（4.2）
	ガイドライン7 興味やアイデンティティを大切に するためのオプションをデザインする。	・ バイアス、脅威を与えるもの、気を散らすものを減らす（7.4）
	ガイドライン1 知覚するためのオプションをデザインする。	・ 情報を知覚するために複数の方法をサポートする（1.2）

将来の生活を想定した環境設定や活動に対する価値づけは、「7.興味やアイデンティティを大切にするためのオプションをデザインする」、繰り返しの取り組みは「5.表現とコミュニケーションを大切にするためのオプションをデザインする」、他の活動との関連は「3.知識を構築するためのオプションをデザインする」、ともに学べる場づくりは「8.努力や粘り強さを維持するためのオプションをデザインする」、個に応じた支援は「4.やりとりを大切にするためのオプションをデザインする」や「7.興味やアイデンティティを大切にするためのオプションをデザインする」「知覚するためのオプションをデザインする」のそれぞれのチェックポイントと近い内容であると考えられる。

「6つの要点」は高等部の教員による実際の教育活動を基に整理したものであり、根拠となる理論的な裏付けがあるわけではないが、UDLガイドラインと照らし合わせると内容に一致する点が多い。そうした中で、高等部の教員から出た意見は以下の通りである。

- UDL の文言で 6 つの要点を書き換える。また、ガイドラインで 6 つの要点が対応できていないところもまだ実践の中にあるかもしれない。
- UDL の考え方を参考にすることで 6 つの要点をより理論的に整理できるかもしれない
- UDL の考え方を学部としてしっかりと押さえたうえで 6 つの要点を再考するとよい

学部内では、「6 つの要点」に根拠となる理論的裏付けがあると良いとする意見が多かった。しかし、UDL についての理解が学部教員の中でなされているわけではない。そのため、UDL の考え方を「6 つの要点」の根拠としていく場合は、UDL について学部内で研修を行い、理解を深めていく必要がある。

今後は、UDL の視点に限らず多角的に授業づくりの要点を検討することで、「6 つの要点」をさらに整理し、改善していくことも必要であると考え。今後も実践を繰り返す中で、高等部における「将来の生活につながる『確かな学び』を育むための授業づくり」について議論を重ね、よりよい授業づくりの方法を模索していきたい。

3-2 「単元を通して「単元を通して目指す姿」における将来像と各教科の関係の整理

高等部においては、生徒一人一人の「将来像」と各教科等の目標・内容の二つを考慮しながら「単元を通して目指す姿」を設定するようにした。学部の教員から課題として以下のような意見があがった。

- ・「単元を通して目指す姿」と「将来像」のつながりが難しかった。
- ・「単元を通して目指す姿」と学習内容（各教科の内容）との関連があいまいになってしまった。

実際に「単元を通して目指す姿」を設定してみた結果、上述のように教科等の内容と「将来像」を関連させて設定することに難しさを感じたという意見が多かった。また、「各教科等の内容と『将来像』を分けて考える方が、それぞれの目標に対してより明確に指導を行いやすくなる」との意見も学部で挙がった。現時点では、各教科等の内容と「将来像」を分ける方が、より生徒一人一人の成長に応じた学習評価ができ、授業においても学習成果を引き出しやすいのではないかと考えられる。今後「単元を通して目指す姿」の設定方法については「将来像」と各教科の目標・内容のバランス等も含めて検討を重ねていく必要がある。

一方で、教育課程検討委員会では、次年度以降、個別の指導計画の年間指導目標に関する柱立てを全校で共通化し、教育課程との関連をより明確にする形を検討している。そのため、今後、高等部における「将来像」の扱いについても整理・検討が必要となる。これらの教育課程、「将来像」の扱いについての変更も踏まえて、本研究の成果と課題を今後の授業づくりにどうつなげていくのかを検討していくことが重要であると考え。

4 引用・参考文献

CAST (2024). *Universal Design for Learning Guidelines version 3.0*. Retrieved from <https://udlguidelines.cast.org> 最終閲覧日:2025 年 1 月 27 日